

有爾中のかっこ踊り — 有爾中 —

そのむかし、有爾中村の多くの人がはやり病にかかり、村中はたいそう荒れはて、村全体が悲しみにつつまれていました。

そこで、このままでは村が滅んでしまう、なんとかしなければ—と。みんなで話し合いました。

「そうだ、わしらの宮さんに願をかけよう。」

と村の人たちの病気がなおるよう神前で踊りを奉納すると誓ったのです。

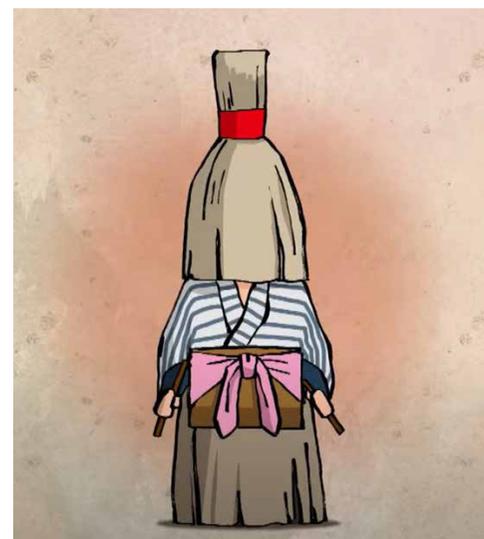
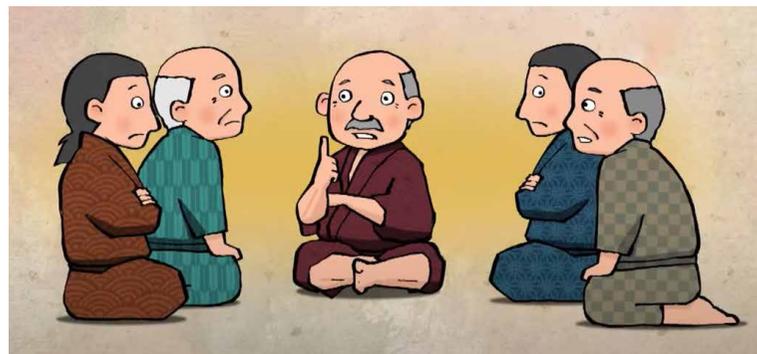
田植えが終わった六月十一日の夜、頭に赤熊をかぶり棒縞の浴衣を着て、腰蓑をつけ腹には羯鼓をかかえ、みんなお寺に集まりました。

そして、あかあかと燃えるかがり火のまわりを

「ドンドコドンドコ」

「ホーエ ホーエ」

と三日間踊りつづけ、十四日の天王祭には、桜神社の神前で踊ったのです。





すると、重い病のため熱にうなされていた人達もたちまち元気になり、有爾中村には再び平和がもどってきました。

それから毎年、天王祭には`かっこ踊り、を奉納^{ほうのう}しましたが、それを踊れるのは長男だけで、次男には教えなかったということです。

昭和三十五年まで続けられたこの行事も、踊り子不足で消えてしまいました。



キーワード：みんな、有爾中、かっこ踊り、天王踊り、宇爾櫻神社、お祭

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんな』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。